911.168
M4442m
W

岩山文庫

岡島茅氏集

上

岩山文庫

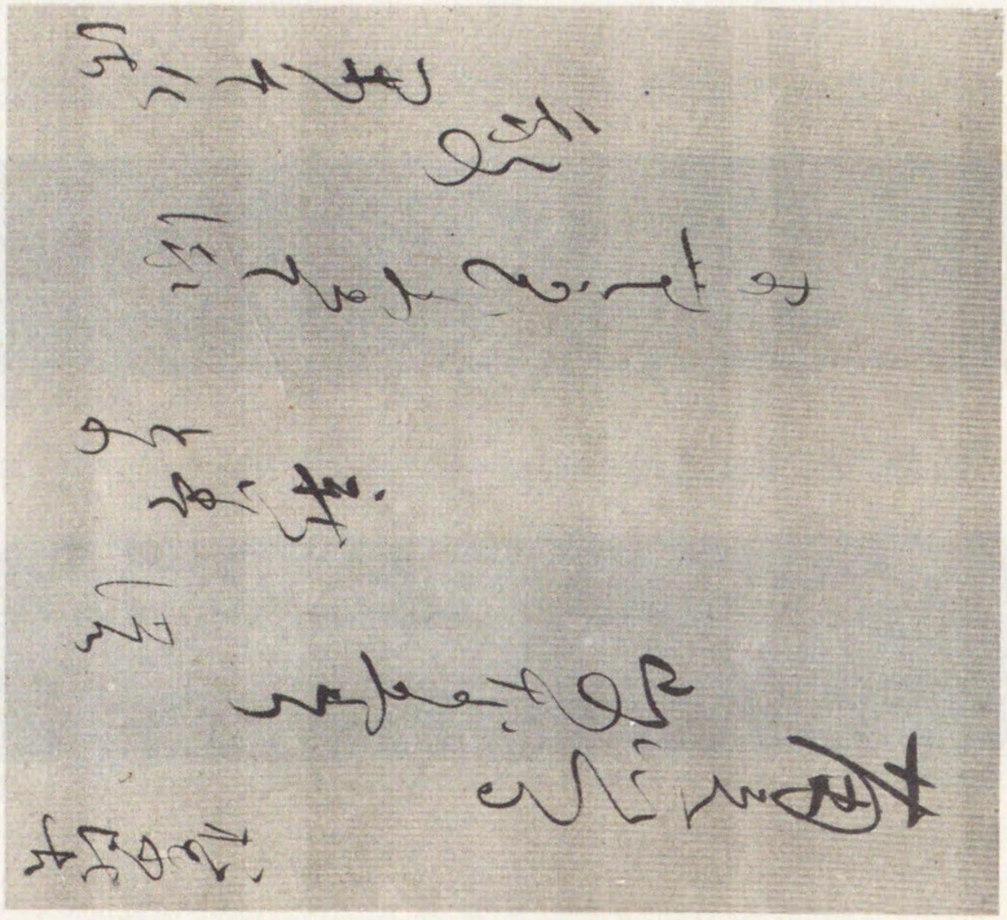
911.168
M444zm

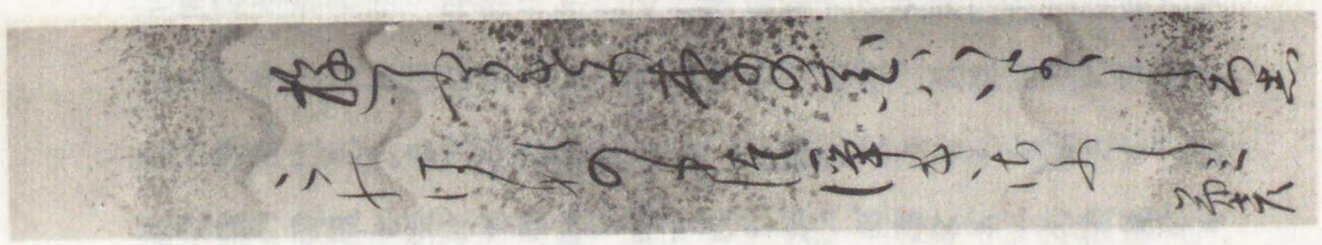
国立国会
41.5.-7
図書館

住友務氏寄贈書

693581

白水莊之圖





間島弟彦君は、明治に於ける桂園派歌人の先達間島冬道翁の男なり。予が君に遇ひつるは、三溪園の夏の夜、月は海上にきらめき、篝火はあかき芝生の卓によりて、歌がたりせしを始とす。君は父翁の遺風を受けて和歌を嗜まれしが、何事にも一の識見をもたるる君は、歌は舊風の重んずべきよしを切論せられたりき。後みづから悟るところありとして、新月會に入り、更に一水會を興して、孜々として倦まれざりき。かつて長崎にものして、「旅の歌」一卷を印刷し、知友に頒たれしことあり。その後の作をあつめて世に公にせられむことを慫慂せしかど、君は他事には大膽なりしも、歌には極めて小心にして、心の花に寄稿せらるるに過ぎず、

ここに遺稿として印行するに至りしは、眞に遺憾といひつべし。
君の令息道彦君は、天才ゆたかにして、不幸にも人世の齡を享くること短かかりしが、君また病臥すること數歲、或は、肺腑よりほとばしり出づる沈痛の情を抒べ、或は、自然の景物を凝視して詠み出でられし諸作は、父翁の歌集と相竝びて、永く後世に傳はるべきなり。

君若くして北米に遊び、アルビヨン大學を卒業し、猶深く專門學の研究に從はむの志ありしに、母堂病篤しと聞きて歸り、しばらくして銀行界に入り、專心事に從ひ、濟輩に重きを置かれたりき。また趣味の人としては、最も書に巧に、繪畫の鑑識に達し、

特に造庭の術をよくし、鎌倉の白水莊、輕井澤の臥雲山房の林泉の如き、みづからの設計に成れり。また建築を好みて、白水莊中に、扇が谷なる英勝寺の山門、紀伊陀羅尼寺の一堂を移しなどもせられき。

君は、資に乏しき青年に同情し、家に寄宿せしめ、南甲寮を設けて、多くの學生を養はれたりき。また、母校青山學院のために盡くされしこと尠なからず。人と語るに、その言率直にして往々辛辣なりしかども、友愛の情は篤く深かりき。

予いはじめて君を横濱に知りしより、或は京都四條の納凉の宴に招かれ、或は日光鹽原に觀楓を共にし、また、輕井澤の山房の

露臺に對座し、由比が濱に、滑川の涯に、おとなひし思出は盡きせず。君の遺稿より選抄の筆をとりつつも、筆はしばしばたゆたひぬ。君は、白水莊庭前の李花を愛し、毎年そがもとに宴を開かれき。春はやがてめぐり來むも、李花のもとに君を見ることなからむ。噫。

昭和三年十二月

佐佐木信綱

小傳

間島弟彥君は、明治四年七月七日、尾州名古屋藩士にして有名なる歌人冬道翁の第七男と生る。母は大鹽氏なり。初め學習院に入り、後青山學院に學ぶ。明治二十四年米國に遊び、留學四年にして歸る。職に十五銀行に就き、同三十一年三井銀行に轉ず、行務を帶びて歐米に赴くこと兩度、横濱及び大阪支店長に歷任し、大正七年選ばれて取締役に昇り、大いにその才能を發揮す。同十二年病を以て職を辭す。然れども、請によりて、舊藩主德川家顧問、及び青山學院理事の任に留れり。居を鎌倉小町滑川の畔に占

めて白水莊と稱し、夏は信州輕井澤の臥雲山房に在りて、以て、悠々自適せり。

君は啻に學殖に豐なりしのみならず、資性剛直にして明敏、頗る議論を好み、而して人服せざるなし。君また氣慨に富み、人の爲に計る忠實にして、その助に賴るもの極めて多く、曾ては東京駿河臺に寄宿舍を設けて南甲寮と呼び、書生を養ふ所となせり。君の門下に人材を出せる少からざるは宜なり。君の造詣、最も和歌に秀でたること、世自ら定評あり。加之、建築造園を始め、趣の向ふ所可ならざるはなく、更に繪畫、謠曲、或は撞球、將棋の遊に至るまで、其技尋常人を拔く。一子道彥、夙く麒麟兒の名あ

り。學問將に大成せんとして、君に先ちて逝く。世の悲此に過ぐるなし。蓋君病重きを告ぐるも、餘命を繪畫と將棋に親んで止まざりしは、力めてその憂を散ぜんとする爲なりしものゝ如し。

去年三月二十一日、終に齡五十八歲を以て卒す。加納氏の出なる夫人は、賢明の聞あり。此間に處し、能く家を守りて從容たる、苟くも間島家を知る者の敬服措かざる所なり。先考は明治の歌人として存し、君の名亦大正の歌人として傳へらるべし。

間島弟彥君逝いて一週年近からむとする日

友人　米山梅吉

間島弟彦集 上

歐洲にものしける時、ヴエニスにて

大路小路水のヴエニスの夢の朝を櫂の響きも
なだらかなりや

聖マルコ鐘のひびきに鳩の群とびたつあさを
片時雨せり

倫敦

霧こむれば聖保羅もつかの間に消え行く朝の
乗合の馬車

明治四十五年一月、米國に赴く

長旅の仕度ととのへ今はとてはしゐして見る
冬枯の庭

夕づく日そびらにうけて大空にいよいよ高く
尊き富士の嶺

落日(らくじつ)のくれなゐもゆる浪の上をみさご掠めて
船のすすみ早し

大海原日の入る方の故郷の宵のまとゐにわが
上や語る

新年熱海行途上

松並木走る車のまどに入る初富士が嶺の雪の
さやけさ

萬歳の大紋の袖ひるがへす風のどかなり密柑
多き村

鹽原より原三溪君に

君とわれ文を論じて鹽原の山のもみぢ葉折る
とゆめ見し

大正三年八月、妻を伴ひて北陸にものす。山中溫泉にて

岩床をきりてうがちて落ちたぎつ水のよどみ
に鮎遊ぶ見ゆ

山代公園

見はるかす丘の赤松あかき幹に暫しやすらひ
陽は海に入る

越中途上

射水川河原青野にむれ遊ぶ牛のそがひの眞帆
の夕凪

信濃途上

岩と岩とせまる溪間のやせ畑に蕎麥の花寒し
山鳩のなく

大正六年春住吉にて

めまぐるしくしかもうつろな現し世をさかりて見たり山の白梅

松風も谷のひびきも雨のおとも山のこころにとけ入るあけくれ

王侯の富貴なにせむ山と海としみづと松と膝いるる庵と

栖霞村荘の額を贈られたる原三溪君に

小松うゑ馬酔木よせ植ゑむかつ峯の松までつづく山荘の庭

あへぎ〳〵のぼるうき世の坂道に病みてを暫し休ひてゆかな

おもふ事さかしくなりぬ世をさかり世に忘られて病みてをあれば

山荘の窓ゆ見おろす人の世とかかはりもなき
今日の日くれぬ

天地をよそにかぎれる繭ぬちをわが世と蠶ら
は足らひて生くも

新月會なる岡田春湖君より「病いえて君が頬にゑみののぼる頃住吉の里に花さきそめむ」といひおこせける返し

來ませ君やがて我が住む住吉の花もわらはむ
我もいえなむ

安治川や船臺ならぶ工場の石炭山の春のあわ
ゆき

嵯峨の奥大竹やぶの春の雨に青み烟れり目路
の限りは

歐洲戰亂

市に來て人喰ひあらす大虎をうちてたふさむ
手力もがも

なにのためのこの戰ぞ歐洲の地圖の色すこし
ぬりかへむとや

千萬の民を贄とし魔の神をいつきまつらく戰
といふ

時しあれば樹をぬき山をくつがへす大風ふき
て新たにす世を

京都眞如堂にて

柄香爐の烟ただよふ内陣のくらきににほふ金
襴の袈裟

近江路にて

膳所の街湖ぞひ道の眞ひる日の袖のしたより
飛ぶつばくらめ

大正六年、京に在る道彦、俄に病を得たり

あまりにもけなげなる子は病むことのありも
やせんと氣づかひたりし

いたづきの身にあるをさへ忘れしや書よみふ
ける秋の長夜を

病室の窓に燈光(ひかり)あり今宵亦ふみ讀みてあるか
やめるわが子は

學籍をすてよといへば破草履すてんごとしと
ほほゑみぬ吾(あ)子

けなげさよ唯一言も愚痴いはぬそのけなげさ
よ我を泣かしむ

山茶花

清らかにすなほにあれとたらちねの我にをし
へし山茶花の花

ある時

あらがはずいはず語らずおほどかにあがふむ
境ふみてを立つも

わがたてる土を手づから擔(かつ)き荷ひ天に昇らく
ひしめくやから

峯の雲ゆくもとまるもうつそみの人の思ふに
たゆたふ事なく

七日月山の棚田のいただきの空のみどりに鍬
うつをの子

眞なつ日の道の小いしに黒きかげ短くひきて
とぼとぼ行くも

大いなる桔梗の花の花びらのさやかにすめる
秋の空はも

人なき濱汐なり遠くとよむ夜の我にひかれり
はつ秋の月

ふむは大地いただくは天ますらをの手して拓
きて高歩むべし

歯車のしつくりのらぬ話がたき重き莨の烟な
がるる

我の外の人みなうせて世の富を獨し占めば心
ゆくとや

鈍き男牛(をのこ)のはなづらと結び合せ市にひさぎて
米とかへなむ

嚴そかな行列の中に一匹の小猿まじれり歯を
むきて笑ふ

道ゆき人みな一つらに同じ鼻もたると思(も)へば
をかしきものを

母といふ題を得て

うつそみの世にうるはしきなつかしきものの
限りを母としいふなり

ある人に

君あるかぎり君がたつべき六尺の清しき天地
なしといはめや

人の世のむなしきほこりすててこそ大天地は
廣みかがやけ

折にふれて

人と猿と隣あはせのひとへ垣へだてなく世は
なりにけるはや

牡丹

琅玕のくき重げにもふふみたる蕾の色のすが
すがしもよ

平和會議といひかくいふ人の群に見よとくづ
るる大き牡丹か

ふりむける刹那に牡丹くづれちりてむなしき
枝の殘る寂しさ

高橋旭村君を悼む

人しらぬよきわざしつつよき事と氣づかでありし君の尊さ

控へ目なめだたぬじみな一生の總勘定に富めりし君はも

將棋してまてよまたじの爭に頰赤らめし宇治の旅の夜

何事も控へ目がちの君にして盤に向へばあらそひたりし

頼みつる人は大方わすれはてしいささけごとも忘れ得ぬ君

手もてひける眞直の線の直ながらあたたかみ
ある君なりしはや

仁清の釜あと訪うてかへるさの二人ぬらししし
北山時雨

吉富の川ぞひ小間に瀬の音きき語りあかしき
千鳥なく夜を

○
切ぎしの小坪の山の崖の上の赤き一つ家夕照
りにけり

春の海ひかたひろごり白き砂のひかる濱邊に
吠ゆる犬の子

○
奥山の湖のうろくづ汝が世にもさかしらてら
ふやから多きや

築地の家にて

夕汐をゆたに湛へし築地河岸かは風そよろ袖
にあつまる

たつみ吹けば烟うづまき煤ふりて園のしら菊
すすけたるかも

小林政吉君を悼む

したしきをいくたびおくり悲しびてややに近
づくわが最後の日の

若草といへる題にて

若草の妻がおもわのかぎろひに疾風も來やと
恐れかしこむ

窓

月もこよ花も散り來よむらぎもの心の窓は明
けてとざさじ

ある時

過ぎし我今ある我はわびしもよ來む世の我の
幻を追ふ

病兒

折々はなからむ後の事をいふざれごとめきて
笑(ゑ)みかたまけて

苦しげにせき入る聲の我が胸に釘うつばかり
ひびく眞夜中

同じ病に斃れし人といえし人と數へてみけり
わびしき夕べ

生きてだにあらばといのる垂乳根の親の心を
汝(なれ)は知るかも

やみやせて衰へぬともいきてあれ唯いきてあ
れと祈る心を

七月二十日頃、築地にいねて、ふと目覺めたる夜半、やめる子の上を思ひて、悲しび胸にせまり、嗚咽禁じ難し

今の世のほこりも富もうたかたの水泡(みなわ)の如し
汝(なれ)をし思(も)へば

よこしまと小さきほこりといつはりのわが世
やさしも汝をし思へば

吾は妹に妹はた吾に胸ぬちのなげきひそめて
歎くかなしさ

救はしめ世の爲つくす事さはにもたる尊とき
わかき命を

汝が病めばわが屋の床も恐ろしき黄泉の如く
につまだてあゆむ

悲しまず泣かず恨みず冷やかにおのが運命に
安んず汝は

吾は男なり尚し忍ばんまがなしく獨子を泣く
妹のかなしみ

ある時は早もいえんと喜びぬはかなきことを
そらだのめつつ

ある時はくろき悲しき影おほふ吾がふむ地も
われてくだけて

三年の春秋ながき床のうへにただひとことの
かごとも言はなく

暑

どんよりと雨よぶ雲のしづもりに暑き息はく
さ庭べの草

○

月の光あみつつ汐に身ひたせば眞玉しらたま
我をうづむる

島

湖の面をかろらに走る浮島のうきたるこころ
我は持たなく

鎌倉にて

慈悲圓滿無碍清淨の日輪はあかときの空を今しのぼるも

丈ひくき人にならびてとさらに背のびして見ぬ朝とでの濱

寺山武二郎、小磯の客舍にみまかりぬ

生と死の中のためらひ幾日して消えにし若き命かなしも

柿の實落つる音のさびしさ子をなげく寂しき家のさびしきタベ

二十年の短かきいのち薄倖の重荷背負ひて土にかへりぬ

芦の湯去來山房にて

苔ふかき馬酔木のかげを鶺鴒の輕らにあゆむ初秋の庭

○

闇の底に重なる山の黑きかげ燒きただらして
稻妻走る

米倉を七つならべてなほ飢うる富めるやから
の貧しき心

雜然とかさなる物體がうつりきぬ暗を見はれ
る瞳の底に

辻末次郎身まかりぬ

とどまりてゆくをなげかふ心うしなやみ多き
世の秋にしありけり

妻子らを多く貧しく殘し置きて汝が分け入り
し秋風の國

ある時

案山子汝とひねもすあらむ物しりの賢しき詞
ききてあるゆは

秋晴

秋晴のあかるき大路わが行けば樹々も笑へり
石もわらへり

三崎に赴きし時

天城嶺と鋸山と相かたる中のしじまにわれは
立つかも

油壺きりぎし深み藍碧の海のおもてにかがよ
ふ夕日

歳首所感

若やぎていへどおもへどともすればかへり見
がちになりぬ此頃

暴風すぎて荒波狂ふ洋中の船の楫とる人は誰
ぞも

小さき明るみ

わが歩む小さき周圍の明るみゆ無限のやみを
すかし見るかも

我にそふ小さき周圍の明るみを世の何ものに
かへんと思はず

われをさかる人をさかりてわがもたる小さき
周圍の靜けさのよさ

侮らず恐れずふめばふむ足につれてひらくる
小さき明るみ

原田照子刀自身まかりぬ

三十年の思ひ出深きまじはりと君とあはせて
失へるはや

よしあしのけぢめ定かによきはよし惡しきは
あしと思ひ入りし性

さきはひにしかも數奇な生涯のあるじなりけ
り忘れがたしも

慈しみ嬉しみなげき人の爲君がそそぎし貴き
なみだ

思ひやりあまりに深みともすれば誤またれた
る君が眞心

大正九年、京都高野川にて

川を淺み底の眞砂に家鴨らはむねをやすめて
浮藻ついばむ

小門夜だき

萬象は潮に涵れり山のかげ飛ぶ鳥のかげ白雲
のかげ

銀の鱗火影にひらめけばさと入るる網にかた
むく小舟

風早み波さかまきて小門のせと夜だきの舟は
亂れ散るかも

熊本

白川の瀬の音聞きつつ肱とりてことあげせしも昔となりぬ

長崎

しやぎり行く石だたみ道からころと下駄の歯音も夏めきにける

お九日の小屋入の囃子輕うながれ祭こひしき長崎の街

長崎の皐月はうれしうれ枇杷の香のかぐはしも味のよろしも

長崎に病みて

病み勞れし瞳にうつるうれはしき顔二つ三つ我を泣かしむ

病中、財界動搖の報をきく

かこかんどり皆さわめくを我はしも幸薄きかなや船底に寢る

興年少友

心せし我を見かへらず岨道をかけのぼりけむ
若き獵夫は

若人のたける壯心に油そそぎ死地に驅りつる
人は誰ぞも

天分にとめる君はも祖の富を失ひて後立つべ
からずや

輕井澤槻澤山莊に遊びて

不斷の霧うまし色そへ淨き灰根を培(つちか)へる深山

撫子

山も木もはた人影もやはらかう狹霧ににじむ

高原の朝

霧ふれば小雨そぼふれば鳥が音もしめりてき

こゆ遠つ世の如

見はるかす遠萱原を雲のかげさゆらぎなびき
日はほの匂ふ

高原の夏秋に似たりきり雨の落葉松かげに襟
かき合す

大正十年一月、米山梅吉氏、長男東一郎を失はる。一家悲風慘雨、慰むべき言の葉もなし

雄々し子の力漲るむくろより若き命を奪ひ去
りぬ死は

迫る死を拂ひつのけつ雄々し子は命のかぎり
戰ひしはや

傷ましき死のあらがひを見つつ唯にうつそみ
人はせんすべあらなく

二十年を一日とおぼしそだてつる親の心を思
ふにかなしき

死は遠く近くさまよふうつしみの普門品誦す
はふりの朝を

葬(はふり)のさわめき去りてさびしさの日々にまさら
む寂しき家は

人さはに大路はゆけど失せにし我が子に似た
る面影やなき

大正十年二月、長岡中將の令嬢自動車にふれて身まかる。芳紀十九

はしき子も花も多けどこの花を此はしき子を
ちらしし夜風

○

おもふ事いつはらずいふうつけ人かたくな者
も稀にまじれり

道彦の發熱中

けふもまた事なく暮れぬ落ちかかるいはほの
下の暗き我家

小室三吉君の死を傷みて

あらがはず逆らはずしかもおのが立つ立場を
かたく守れりし君

○

秋晴の大天地にうせはてぬうたがひ心よこし
まごころ

さばきする我の前にもかにかくとつくりごと
する我をやさしむ

ある時

ゆるぎなきいしずゑのうへにたつ家と人はも
いひき我も思ひしを

十月、佐佐木大人、あい子と共に、日光より鹽原に遊ぶ

山峽の小さき窪地にしろがねの川すぢひかる
樹の間透して

汽車の烟おもくよどみてゆく秋の大とね川に
長きかげひく

落葉松の黄ばめる細葉ちりちりて人影もあらず湖添小路

うらら日の光あまねし毛野大野こがね穂波に遠山脈に

藍碧のそらをかぎれる尾根の線にむらむらとわく雲のかたまり

ぶなの林ゆふ日にひたり淡く濃き落葉が上にみだるる光

虫

甘き香にひたりて蘂を食ふ虫のここだむれたりはしき薔薇に

小田柿君の鵠沼の別墅に、一水會の人々とつどひて

川をちの松原幾重たたなはる五月の空に舞ふいかのぼり

土岐儀君の還暦賀に

扇が谷みづ枝さしぐむ初夏の緑をしめて君よ
千代ませ

河野一郎氏佐佐木弘子嬢と結婚の祝に

むつみあひ親しみあひてまあかるき大道あゆ
ませ直に平らに

詠逗子藤瀬君別墅百合花

山ひめが緑の御衣に手すさびの縫模様置く白
百合のはな

海の風陸の風ふく高楼を咲きうづみたる白百
合の花

潮に浮ぶ天城嶺近し百合の香に咽びやすらむ
その山姫の

折といふ題にて

折り馴れしひざさしのばす方丈の庵をめぐり
て瀬の音涼しも

三井養之助氏の御はふりの前夜、本村邸の棺前に通夜して

かがやかしきその世の果をしばしとて花に埋
もれ静もり居ます

君世にし在ししほとりいづくにもにほひやか
なる笑は流れき

蜻蛉

尾に紙を結びつけられたそがれのわが狭庭べ
を飛びゆくあきつ

松木立ひま飛びぬけて隣よりのがれ來しかも
わが狭庭べに

ゆふ暮のおばしまによるまなかひを蜻蛉とび
とぶ白き尾をひき

ある時は紙の重さにたゆたひて舞ひ下りまた
矢のごとのぼる

たゆたひぬまひ下り來ぬあわただしう又まひ
上る恐に追はれ

をののきに勞になえて小さき羽のたゆたひ見
ゆも松の木ぬれに

狹けど芝生清らにつゆしげしまばしやすらへ
なえし其羽を

とびとびて翅なえ果て露芝にたふれ伏すべき
あきつよあはれ

なえつかれ舞ひ下り又まひ上る羽音かそけく
わがゆめに入る

おびやかされしへたげられてつひに行く同じ
運命のあきつと人と

休らはばやすらふべきを勞れはてなゝはつる
までとゆきかく行く

○

直向(ひたむき)にまなこをあげて否といふ意氣地をもた
ぬ豕(みのこ)のやから

刺もたぬ仙人掌にそへて小ざかしき骨無し漢(みのこ)
豕(みのこ)にはめなむ

知らぬ事知れるふりするはしたなし知らぬふ
りして知れる小にくし

さかしげに物いふ子かな夏川のちよろちよろ
ながれ底もあらはに

馬追のなく音(ね)さびたりふとさめて壁の白きが
身にしむ夜寒

小野友次郎氏を弔ふ

松葉が谷松のむせびを獨ききし君が今はの心
かなしも

金塚壽美子孃の結婚を祝ふ

君とつぐ家に幸あれ君いますほとりに常に光
あらせよ

朽葉

芝生に眠る朽葉の唯一葉かろくまひたち一葉
またまふ

玉ゆらを舞ひたちし朽葉やがて地に墜ちて眠
れり朽葉が中に

動くてふことを尊とみ夕しじまをぐらき庭を
朽葉まひとぶ

ゆふ闇の靜もりふかき庭の面を朽葉さゆらぐ
ほのに光りて

くち葉空にいゆきためらひうきしづみやがて
消えゆく垣のそがひに

夕月夜朽葉一ひらつとたちて舞うてふしたる
庭のしづけさ

舞ひのぼる一葉二葉を地の上にみまもり並ぶ
臥せる朽葉は

三井高保男の逝去を悼みて

一言のわがまごころを御棺に告げまくをなみ
心くらしも

のたまはす言葉すくなみ思長くいつくしみ深
き君なりしはや

サイベリア號にて歸朝の航海中にある米山梅吉氏に、大正十一年一月六日、無線電信にて送れる

にひ年と君を迎ふるよろこびにまじらひ浮ぶ
去年のかなしみ

翌日米山君より返電あり。「船は今黒潮の上を八洲(やしま)さす通ひくろ血の胸にあたたけし」

紅茶の湯氣ゆらめき上り壁紙の菊のはなびらうるみたるかも

はだら雪のこる狹庭に夕光ほのめきながれ魚燒く香(にほひ)す

朝吹磯子夫人よりフリジヤを贈らる

若き母にすがる子らの如フリジヤはかよわきくきにつらなり咲くも

佐佐木三枝子孃の久松潛一氏に嫁がるるに

若き妹脊さいはひみたせおだしき世學の門の樂しき家に

○

朝日かげうららに映えて雪の面のそここにおく薄墨のくま

うつし世にかかはりうすきかくれがを埋みは
つべく白雪は降る

すず懸のさ枝芽ぶかず春の陽はまだら木肌に
たゆたへり見ゆ

山下芳太郎氏に

手をとりてわが眞心の一言を告げむすべなし
遠く病む身は

小田柿捨次郎君の眼病に罹れるを慰むとて

常暗の長夜をながみもだえ臥す君がこころに
光あらせよ

かけ鳴きて朝日匂ふ時とく來れ君がやみ臥す
暗の底ひに

病む子

對數表胸のうへにひろげ天躰の距離を計りて
過ぎにし半日

我も病みて

相見ざる日の重なりて同じ家の病める父と子
とふみ取りかはす

苦しさいくるしかれどもその去(い)にしあとのや
すけさ人は知らずも

病みて我ここだ幸ありおごそかに静かに思ふ
大きまことを

病みそめて風をいたみし去年の窓に尙しも凭
れり萩が花咲く

午後の光うららにさして水盤の波紋のかげの
壁によれたる

夜のしじま心なごめるたまゆらを鏡にあたる
蠅の羽ばたき

○

求むるものすくなうなりぬ生につかれ我にあ
きたるなまけ心か

地上の雪空のさみどりわが生とかがつらひな
くさやかなる朝

ツルゲネフの「ルヂン」を讀みて

言靈のめぐしきに醉へる少女子の灼熱の戀を
愛しみにけり

赤倉山にスキーせる若人に

雪やけの丹の頰かがやかし健き子は赤倉山に
スキイ行るかも

群集

幾千の人の群みな肩ふれて腕くみ合せ直に押
しゆく

躓きて倒るる者はふみにじり踏みこえ行くも
力强き群

土壌(くれ)の小さくしあれど相よりて相かさなりて
天そそりたつ

ちひさなる土くれすらも群に入り心おごれり
巨巖なして

大いなる群の一人のわれは在り生ける一人の
我はいづらぞ

群にありて力はありき群を去りて獨たつべき
すべし知らなく

疲

書よむも物うし今日はつかれ心(こころ)ただ此ままに
そとおきてあらむ

湯上りのきざはし上る息苦しさ身の衰のしる
くしありけり

朝床に眼覺むるやがて此疲おもき心の今日の
くもり日

めを閉ぢて靜かにあればこのつかれ身の何處
よりわきて來らんか

ベコニヤの花のいきづくさゆらぎもなやまし
今朝のつかれ心に

シクラメン

綠葉のひろ葉のかげのめぐし花相よりて咲く
おとどひのごと

滿鐵事件

横這へる蟹はふまれぬおのが孔の狹くただし
き世には住み得で

○

數かげに日傘ゆらぎぬ粟畑のあはの穗の上に
白き顏見ゆ

塔頭の破れ障子に火がともる雨にけぶらふ丘
のたかやぶ

ある日

人の世に甲斐ある命いけらくは弱しむなしく
あらむ物うし

病みぬれば病にかくれ人の世の人とふことも
忘れてありける

生くるもよし死するもよけむ生ける間は生け
る一日といそしまむ今日を

俯せば地に哀愁おほし春の光みてるみそらを
仰ぎてゆかな

ものいはず世にまじろはず獨居は淋しくあり
けり樂しくありけり

大き死の靜寂(しじま)の湖(うみ)にせせらぎの落ちんを暫し
たゆたふ心

ひとたびは死してほろびて甦へるにひしき命
大いなるいのち

ある時は鉛のごとくわが心病の底にせぐくま
りをり

水底の石塊(くれ)に似てわが心くらく重たく日に遠
ざかる

悲しびの岩間湧きいづる眞清水の甘きに醉へ
る思なりけり

守錢奴が錢よむ如も過ぎし世の出來事ならべ
もの思ふ夜半

提灯の二尺の徑にあかるみを見つめつつ行く
大き闇の夜

犬

膝の上に頭をのせて我を見る犬の瞳にゆらぐ
わがかげ

櫻草

病室のむなしく廣き白壁の寒きに映ゆる櫻草
の花

送鈴木梅四郎君外遊

燒太刀の利心もちて君が行く海の八十隈濤な
荒らびそ

○

かなしびをかなしぶ心喜をよろこぶ心もたる
うれしさ

アルビオン在學當時懷古二首

村時雨宵をさと過ぎて裸樹の柏のうれに光り
し栗鼠の眼

夕月夜氷滑(すけいと)すべくわが越えし森の落葉の今も
さやぐや

○

眞夜中に眼覺め瞳(め)ひらきながめ入れば底なき
暗黑(やみ)は重くかかれり

つくづくと物くさつのる雨雲は低うたれつつ
南風(みなみ)吹きそめ

雙の腕萎えはつるまで鞭うたばゆるぎやすべ
きなまけ心の

齒車の鎖のひと輪とり代ふる手間だにうけず
氓び行くもの